年頭挨拶

和歌山県地域・自治体問題研究所
理事長　鈴木　裕範

新年明けましておめでとうございます。

二〇一八年一月一日午前六時三〇分、和歌山城の天守閣に登り日の出を待ちました。日の出の時刻は七時五分、三層の天守閣の最上階は早くから人で埋まっています。

再建60年を迎えた和歌山城

「和歌山城を愛する人は、多いんだ」と一人納得していると、新年最初の朝日が、厚い雲をかき分けて、東の空にゆっくりと昇ってきます。そして、七時三〇分を回った頃、雲が金色に染まり太陽が眩い光となって姿を現しました。合掌。振り向くと、背後で旅行か留学か海外の話が弾んでいた女子が三人、手を合わせていました。日はすでに高くにあり、柔らかな新春の光が街に降り注いでいました。

元旦の天守閣に登らせたもの、それは、還暦を迎える和歌山城に祝意と感謝を伝え、わが街の現在を見つめたいと思ったからです。周知のように戦前、名城と讃えられた国宝の城は、敗戦の日のひと月前に戦火に焼かれて落城しました。それから一三年後の一九五八年、和歌山城は市民たちによって白亜の城として復活します。全国の多くの城下町で城の再建ラッシュが見られるのは、それより後のことです。いち早い築城は、市民による和歌山城の「価値」の発見に気づかせます。

和歌山城が見つめた和歌山市の六〇年は、どういう時代だったか。天守閣から東西南北を眺めると、都市の変容が見えます。かつての城内は高層のホテルやマンションが建ち並び、堀川がめぐった「水の都」の面影を探すのは難しい。また、城下町の時代にさかのぼる伝統産業や伝統工芸品の生産は衰退が顕著で、「紀州和歌山」らしさをさらに見えにくくする要因になっています。このことは、いまを生きる私たちへの問いかけです。すなわち一人ひとりの歴史観が問われ、文化を基準とするまちづくりの問題だからです。和歌山城再建六〇年は、そのことを見つめ直す機会になるはずです。この街のこれからをもっと議論し合い、考える一年にしませんか。弘前から熊本まで全国の城下町を訪ねてきて、私が感じるストレスは、城下町和歌山における「城下町再生論」の不足です。

和歌山市は、中心市街地活性化が喫緊の課題になっています。かつての三の丸で新市民会館や県立医大薬学部の建設計画が進み、その向かい側の二の丸跡では、紀州藩時代の大奥復元計画が潜行中です。これはまさに「城下町再生論」に関わるテーマです。和歌山市民図書館の移転、民間運営の導入は、どこで決定したのか、市民レベルでもっと議論すべき問題でした。おかしい。再建六〇年、和歌山城の「主人公」は、市民でなくてはなりません。

わかやま住民と自治
発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9　太田ビル203号
TEL･FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp　2018年1･2月号
2017年12月25日発行　第295号　（月300円）

目　次

年頭挨拶　鈴木　裕範…… 1
地方自治ここにあり　首長インタビュー
古座川町　西前　啓市町長…… 2
かつらぎ町天野区長に聞くまちづくりの道のり・抱負
絶えず入れ替わり存続してきた歴史
――世帯の25％移住者占める、待機者も―― …… 7

地方自治ここにあり　首長インタビュー

高齢化率県下一のまちで
住民に寄り添い、福祉の町・観光の町へ

古座川町　西前啓市　町長

今回の「首長インタビュー」は、古座川町の西前啓市町長に登場していただきました。西前町長は、２０１６年６月５日に、三度目の挑戦で42票という僅差で当選されました。

和歌山県内一の超高齢化の町で、とにかく住民の意見を聞きながら、日々奮闘されている町長に、当研究所の鈴木裕範理事長が本音をお聞きしました。（インタビューは２０１７年11月20日）

西前啓市古座川町長

三度目の挑戦

鈴木：「３度目の正直」という言葉を実現されたのが西前町長だと思います。３度目の挑戦に、西前町長の町政に対する強い意志を感じるんですが、いかがだったのでしょうか。

町長：私は職員として38年勤め、議会と教育委員会以外ずっと回ってきて、最後の方は長い期間、福祉関係に従事したんです。

町長選挙は、思いつきで出たんじゃなしに、役場へ入った当時から、チャンスがあったら絶対に町長をするんやと心の中にずっと持っていたんです。

鈴木：なるほど。自分が町長になったならば、こういう姿勢で行政を運営するんだという思いがあったということですね。その西前町長にお聞きします。町政に対する基本的な政治姿勢からお伺いしたい。

町長：やっぱり公正でなければいけないということですね。いろんな人の意見や思いをとにかく聞くこと。そして、行政に結び付けていけたらいいなということです。御存じのように高齢者ばっかりの町なんですよ。ですから、高齢者の生活をどうサポートするかということを、真剣に取り組む。介護保険が始まる2年前に国のモデル事業の募集があって、たまたま私が担当していたので手を挙げて、全国で10か所のモデル団体のうちの1か所に選ばれたんです。そのときから、何十年も高齢者の方の生活を見てきたので、私は、そういうところが分かるんじゃないかなということがあったんです。

鈴木：町長選挙は、42票という大接戦でした。町を二分する激しい選挙戦だった証明でもあります。それだけに、どちらを支持するかで分かれた町民の民意を融和することが、トップとして必要かと思うんですが、どうでしょうか。

町長：私は、前回１３６票差で負けたとき、マスコミの方に答えたのは、当選された方にノーサイドでお願いしたいと言わせてもらったんです。今回たまたま支持を頂いて、立場が逆になりましたけども、やっぱり私はノーサイドで頑張っていきたいと答えたんです。町民のための町政をするんだというつもりで、1年5か月やってきたんです。議会で少数ですけども、質問の中にちらほら見られます。一般の方は、極端に西前になったから何もかも反対やという方は、ないように思います。中には、西前では困ると言い続けている人もいますよ。だけど、私はそれを融和させていくために、自分から出向いていって、いろんな会話をすることによって、日々、活動しているつもりです。

古座川町役場

町の現状と課題

鈴木：古座川町は、平成の

中国桂林の風景にもたとえられる古座川

市町村合併までは、和歌山県でもっとも面積の広い町でした。一方で、過疎化に歯止めがかからない。高齢化率は和歌山県で一番、50％超えていますね。

町長：11月1日現在で51・9％です。

鈴木：地方創生総合戦略で、2040年までのシミュレーションですが、人口と高齢化率は、どうなる見通しですか。

町長：人口は今、2800人ですが、1500人ぐらいまで減少します。高齢化率は58・6％ぐらいに上昇する見通しです、いまのままだと。

鈴木：古座川町の最大の悩みと申しますか、解決しなくてはならない課題というのが、この人口減少と超高齢化にどうブレーキをかけるかということだと思います。人口問題、その辺の対策は、いかがでしょうか。

子育て支援

町長：古座川町は、昭和39年ぐらいを境にずっと人口が減っています。原因は、やっぱり働く場所がないということが一番大きいですよね。若い人が、戻ってきてくれるような政策をすることが1つの方法だと思います。私は、当選させてもらってから、若い人に残ってもらうために、若い人たちの生活の負担を軽減するため、子育て支援を思い切ってやろうと、議会の協力を求めながらやってきました。医療費の無料化は、今年の4月から、15歳未満の児童生徒から、18歳、高校卒業時まで3か年の延長をしたんです。そして、給食費も保育所と小学校は、去年の10月から無償化して、今年の4月から中学生まで拡大したんです。保育料についても、今年の4月から、所得の低い人（人数的に約半分ぐらい）は無償にして、残りのまあまあ所得の高い人は、2分の1（国の基準の4分の1）にしました。

鈴木：子育て支援の関連予算は、かなりの金額になったんではないですか。

町長：いや、そんなにむちゃくちゃじゃないですよ。今年4月から無償化した保育料で、大体7、800万円。高所得の分で、大体300万円弱ぐらいだと思います。うちができたのは、対象者がそんなに大規模じゃないというのはありますよね。

鈴木：どういうやり繰りで、予算の捻出が可能になったのですか。

高池保育園

町長：基金もそれなりにあるし、とにかく無駄遣いはあかんよと、いる分でなければということを徹底しているつもりです。住民の求めるものであれば、ハードであってもソフトであっても、住民と話合いをしながらやればいいと思います。住民の求めないものを行政サイドでつくっても、結局、無駄遣いというのを、これまで見てきたので、子育て支援の予算は大した金額ではないと考え、議会に提案したんですけど、特に反対もありませんでした。必要なことにはお金を入れる。そうじゃないものは始末をするということも徹底しようと思っています。

若者の定住対策

鈴木：若者の定住対策として、働く場、仕事をどのようにつくりだすのか、これについては、どうお考えですか。

町長：たとえば、ここ3、4年ぐらい前から、ニンニク生産を若い人らが起業して、やっているんですよ。若い人でも農業に従事してくれる人もいるし、樒をつくったりする人います。そういう方々の支援もやりたいなということで、設備投資を商工会で融資して、事業を推奨してるんですが、もっと利子補給できるような仕組みづくりを考えています。今、商工会でやっている利子補給が1パーセントなんで、産業の振興基金みたいなものをつくり、もうちょっと助成できないか相談中なんです。

鈴木：そうですか。若い人たちの移住といえば、I、U、Jターンの若い人たち

が、カフェとかレストランとか、いろんな形で、食を中心に移り住む動きが各地で見られますけれども、古座川町でのそうした傾向はどうなのでしょう。

町長：少ないです。町内では小川のカフェと、中崎地区に喫茶店があります。

鈴木：自ら仕事づくりをしていこうとしている若い世代の起業を支援する補助金も大事なところで、古座川で起業したら、こうした支援をしますという制度的なものはいかがでしょうか。

小川地区にオープンした女性が経営するカフェ

町長：うちは農林業の町やから、産業振興補助金は結構多いんですよ。

鈴木：期限が切れるような補助制度ではなくて、自立できるところまで支援できるような仕組みをしっかりつくっておかないと、お金の切れ目が縁の切れ目みたいになって、それで失敗しているところもたくさんあります。さきほどのニンニク生産の方々にたいする支援ですが、どのようなモデルがつくれるのか、注目させていただきます。

いっぽう、高齢化率が50パーセントを超え、2人に1人が高齢者の町という現実にどのように立ち向かうのか。高齢者が一生を安心して送ることができる、住みやすいまちづくりをどう進めていくお考えですか。

高齢者の対策

町長：町内に高瀬会という民間の社会福祉法人があるんですよ。そこを十分活用させてもらうということがまず前提にあります。そして、この奥の七川というところの施設でも、1か所（町の建物で現在改修中）デイサービスがあり、居住している方も4人いるんです。それから社協もありますので、高瀬会と二人三脚みたいにやっているんですよ。

保健福祉センター

鈴木：そうした施設で対応するということですね。ところで、高齢者の皆さんは、この町の暮らしをどう思っているのでしょう、意識調査をしたことはありますか。

町長：そういう内容のものはやった記憶ないです。明神から下は、13年災害、23年災害のときに、2回水害で浸かっているんですけれども、よそへは行きたくないんですよ。年がいったら今のままがええんやという高齢者の方が多いんで、意識改革しようと思っても非常に難しい問題です。

町の魅力づくり

鈴木：そうですか。若い世代を含めて、この町で多くの人が暮らしたいと思うには、古座川町の魅力づくりが大事ですが、今後どういうふうに進めていくお考えでしょうか。

町長：いろいろなことにチャレンジしていかなければいけないと思います。オートキャンプ場とか、アウトドアのようなこともやりたいなとは思っています。一枚岩から古座川を下るカヌーは、夏場になったら毎日のようにやっていますが、あれは串本町の観光協会がやっているんです。これまで古座川を活かしていくために、職員の中でも結構議論してきた経緯もあるんです。

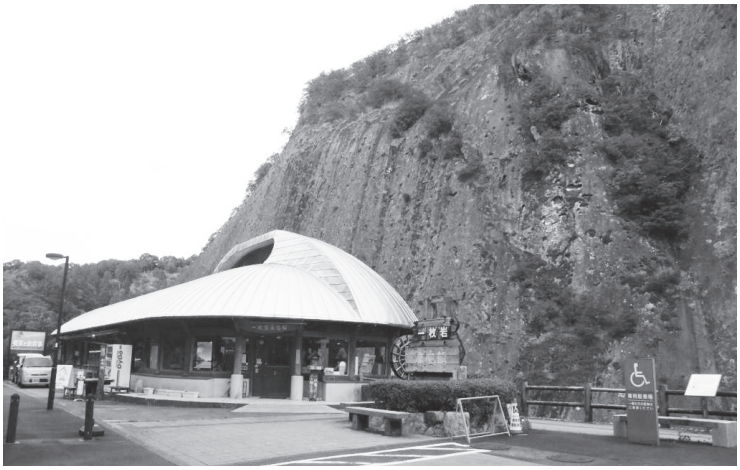
鈴木：外部から見ていると、古座川は、町が持っている森の魅力などが十分活かし切れていないんではないかと思うんです。

町長：そうですね、平成23年のときの台風で倒れた風倒木が川へいっぱい倒れ込んで、そのままなんですよ。県や国やと言ってても、いつまでたっても改善されない。古座川町内のことやから、自分のところで責任持って片付けていきたいと思っています。いくら清流やと言っても、見た感じは悪いですよね。

林業の課題

町長：森林も林業政策が大事なんでしょうけども、正直なところ、これから木材を活かしていこうと思ったら、それは厳しいと思います。いま紀北と紀南に木質のバイオマス発電所をつくるという話が出ているんです。去年の10月頃、島根で視察したんですけど、材料

を回してくるのは、やっぱり山の中でないと無理なんです。そして、あんまり大きなものをつくっても、材料の確保が難しいと言っていました。それでも近くへできたら、間伐材を山で腐らすより軽トラで積んでいったら、固定価格で引き取ってもらえるという魅力もある。近くでやってくれる団体があれば、有り難い。そうした可能性も検討してもいいと思うんです。


名所一枚岩と道の駅

観光産業の振興

鈴木：もう1つ、川と森を活かしながら、観光産業を振興していくことは、この町にとっても、人を呼び込み、山村と都市の交流で地域を活発化させることにもつながります。雇用も含めて、重要な課題だと思いますが。

町長：1人でも多くの人にきてもらうようにしていかなきゃいけない。特に冬場のお客が少ないですから。しかし、古座川町には、宿泊する施設が少ないので来ても日帰りになる。そのあたりのことも、考えていかなければいけないなと話し合いはしているんです。

　じつは、私たちの町にはいま、観光協会がないんです。4年前まであったんですけどね、運営していくのが大変やということで、前の町長さんのときに解体したんです。

　和歌山県下で観光協会がないのはうちだけです。もう一度、観光協会を再構築をしようと、いまいろいろな団体の方々と話合いを重ね、来年の4月をめどに観光協会をつくろうと、作業しています。

鈴木：そうですか。地域を支える産業構造が、第一次産業の衰退によって変わる中、どこの地方自治体も観光産業の育成に取り組んでいる中で、驚きました。

町長：それで、古座川の現況も含めてインターネットとかホームページで発信していきたいし、ふるさと納税と関連して、今、JTBの方と話をしているんです。うちは地元産品は少ないですけども、それをうまく活用すれば、やりようによっては、十分やっていけると思うんですよ。

鈴木：古座川町の産品というと、やはり平井地区を中心としたユズと、ユズに関連する商品があがります、長年の努力で和歌山県を代表するブランドに成長していると思います。古座川で捕れるアユの一夜干し、それと和蜂（日本蜜蜂）による貴重な山のハチミツ。これは高級品で、美容にも健康にもいいということで、ますます関心を集めています。蜂蜜を採取する「ゴウラ」の文化は、もっと発信してもいい。それともう1つ、いま町が取り組んでいるジビエがありますね、11月にはジビエグランプリで大賞を受賞し、加工施設はモデル地域に選ばれました。山村の豊かな資源、文化ですね。そうしたものを、観光資源に活用していくことが考えられるのではないでしょうか。観光の町づくりの視点から、そうした産業の芽を育てていただきたいと思います。

平井のゆず

ふるさと創生

鈴木：話は変わりますが、地方創生総合戦略で古座川町がよみがえるのかどうか、そして古座川町の再生のために何が必要か、これについてはいかがでしょう。

町長：よみがえるかって言われたら、すごく厳しいと思います。少子高齢化というのは、今始まったわけではないんです。ふるさと創生と言っても、受皿がないですからね。ハローワークの所長らとも話をするんですけど、正直言って、アベノミクスの効果は、田舎ではちょっと無理やろって言ってますよ。大都会の大企業は、メリットがあるかも分かりませんが、地方は恐らく、非常に厳しいと思います。

鈴木：アベノミクスの恩恵は、地方では実感できないと。

町長：そう思いますね。

鈴木：安倍内閣のもとで言われている地方創生も地方が頑張れるための力にはなっていないというのが、率直な感想だということですね。

町長：厳しいと思います、

本当に。

鈴木：厳しい中で、町長は、どう取り組むのか、努力されるのか。

町長：まちづくりには終わりがないと思います。その中で時代に対応するものを求めて、何にでもチャレンジするしかないと思うんですよ。いろんな制度、政策をつくりながら、住民が求めるものに応えていくことだと思う。まず、観光協会をつくって、とにかく町をよその人に知ってもらうことが、一番必要だと思っています。そして、地元産品の宣伝や、古座川町にはこういういいものがあるんですよとピーアールして、1人でも多くの人に足を運んでもらわん限り、何も生まれてこないと思うんです。いろんな角度から、産品も始めてみようと思います。今はシルバー人材センターもないので、4月から60代から70代ぐらいの仕事のない人に動いてもらうということで進めていきたいと思っています。

小川の総合センター・僻地診療所・役場出張所

高齢者の人数を調べてみたんですけど、60歳から75歳まで大体800人いるんですよ。そのうち60歳から65歳までの人が、213人いるんです。その年代の人でないと、できないことってあると思うんですよ。

鈴木：持ってる知恵と経験や技術もありますからね。

町長：そこなんです。この上流に月野瀬という地区があって、そこで月野瀬大根という評判の良い大根をつくっていたんですよ。それをグループで復活できないか一遍考えてよという話をしているんです。

鈴木：町民一人一人が、行動する、そんな町にしたいということですね。

町長：そのとおりです。

鈴木：地域にある伝統的な食というのは、一番活用しやすい特産品だと思うんですね。広い町の利点を活かすとすると、それぞれの地域にある特色を具体化できると、面白いと思います。

伝統野菜とか、伝統的な農産物を特産品にするというのは、古座川町みたいなところだったらあるんじゃないかと思います。

ところで、古座川町は、和歌山県内では女性が頑張りだした代表的な地域の1つだったと私は思っています。平井の寺本さんたちに始まるユズのむらづくりが、「柚子の町」古座川というブランドに成長しました。若い世代がそれに続いています。古座川のこの女子力を高く評価して活用すべきだろうと思います。

古座川女子の会みたいな組織をつくるとか、検討してみてほしいですね。最後に、町長から言っておきたいということがありましたら、お伺いしたいんですけれども。

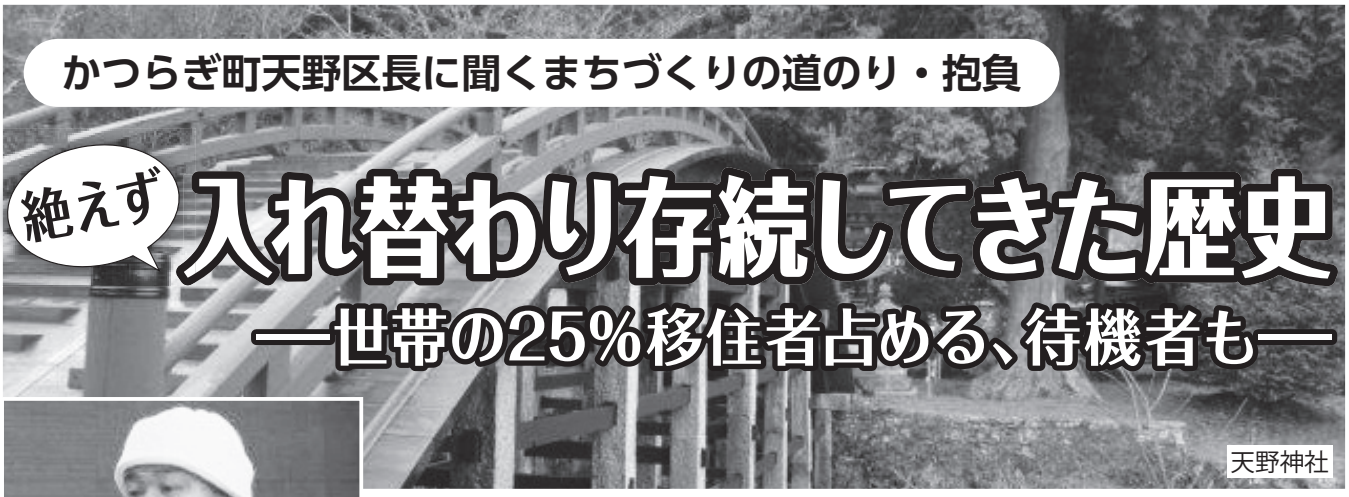
町長：高齢者のみなさんは、ご苦労された方ばっかりなんです。少しでも支援するということで今年の6月から、病院の差額ベッド料の自己負担を町で負担するようにしたんです。近くの公立病院で差額ベッド料が、1日2000円ぐらいなんですよ。それを上限にして、3か月で18万円を免除するという制度を今年から取り入れたんです。少しずつですけど一つ一つ重ねながら、制度をつくっていきたいなと思うんですよ。

観光と交流の拠点　月野瀬ぼたん荘

鈴木：恩恵を受ける人は、どのくらいあるんですか。

町長：平成26年の串本病院を参考にしたら、全体で延べ1000人弱ぐらい。金額にして150何万円だったかな。それは串本病院だけやなしに、差額ベッド料がある公立病院は、全国どこへ行っても可能なようにしたんですよ。

鈴木：古座川町は超がつく高齢地方自治体です。その現実と向き合う政策でもありますね。福祉に長くたずさわってこられたご経験を町政に、福祉の充実をめざす西前町長の思いと受け取りました。きょうは、貴重な時間を頂きまして、ありがとうございました。



天野神社

かつらぎ町天野区長に聞くまちづくりの道のり・抱負

絶えず 入れ替わり存続してきた歴史

―世帯の25％移住者占める、待機者も―

かつらぎ町天野。国道24号線から高野山へ向う、幾重にも曲りを繰り返す県道。両脇には急峻な果樹畑が続く。更に坂道を走ること15分程で、天野高原にたどりつく。天野米の収穫の終えた盆地に民家が点在している。

地域の中心部に廃校なった天野小学校が改装され「ゆずり葉」（本文で説明あり）と命名。新たな地域の拠点としてその役割を果している。今回は、長年の「天野の里づくりの会」のメンバーで天野区長でもある中瀬孝大さんに天野のまちづくりの現状と今後についてお聞きするため「ゆずり葉」を訪問した。以下の記事は後日文書による質問に答えて頂いた内容を掲載しました。

「手打ちそば体験」（12/9）であいさつする中瀬区長

研究所：高野参詣道・天野の丹生都比売神社が世界遺産に登録されて10年余りが経過しました。世界遺産登録は天野を変えましたか、どのように変わりましたか。

世界遺産効果、閑村に賑わいを

区長：天野は、世界遺産登録によって、大きな変化があったと思います。今までも、和歌山県の「風景百選」や、1998年には、現環境省の「ふるさと生き物の里」に選ばれたり、また、2009年には、伊藤忠商事の「企業のふるさと」として提携し、現在も活動を続けているなど、地域としての様々な活動は進めてきました。それらの土台があって、加えて「世界遺産」登録がされました。世界遺産効果は、5年と言われていますが、天野は、何と言ってもリピーターが多く、今でも多くの方々がおとづれてくれています。閑村に賑わいをもたらしてくれたことは大きな効果だと思います。

研究所：その変化は、地域住民にとってはどうなのでしょうか。

区長：人の出入りが多くなることは、それなりの経済効果や文化交流が生まれます。天野の特産品が多くの方に好まれたり、ここ20年間で天野の世帯数の25％が移住者となるなど、文化の流入や意識の変化が表れています。

研究所：この10年ほどの期間で見た場合、天野にとって2つの大きな出来事がありました。

小学校の廃校です、廃校舎の活用が始まっています。学校に代わるコミュニティの核としてどのような運営が行われていますか。また、その実績はどうなっていますか。

「地域の灯台」学校が廃校に 今、新たな活躍の場に

区長：私たちの村は、自慢になりますが、住民の自治意識が大きなところです。そのため、先々代々から教育には大きな関心と努力がなされてきました。学校は、「地域の灯台である」との意識です。村の中央の一等地に学校を建築し、村の子は、全て自分の子として育て対応してきました。その学校が無くなることは、村の存続にかかわる大きな出来事でした。しかし、これも時代の流れとあきらめ、学校跡地の再利用を考えました。全区民にアンケートを取り、住民の要望と村にとって効果がある施設を模索しました。その結果、気軽に宿泊でき、フィールドワークが楽しめる施設として、「簡易宿泊施設」としてスタートしたわけです。幸い、耐震基準が満たされていたため、村の緊急避難施設としての役割も持たせました。また、公民館機能や地域のコミュニティー施設としての役割も備えています。地域のコミュニティー施設としての活用は活発に利用されています。宿泊施設としては、2年目になりますが、観光で来られ利用する方、また、大学やクラブの合宿で利用される方などが多く、当初の利用計画を大きく上回っています。光熱水費などは、行政で負担していただいてますが、施設の運営費については、利用収益で賄うことができています。

天野の田園風景

研究所：人口減少社会、少子高齢化が進む中で、将来世代にどのような天野を残すのか、区長のお考えはいかがですか。

区長：日本全体の人口が減っていく中、天野だけ人口が増えるとは到底考えられません。行く行くは、天野も消滅集落になるかもしれません。しかし、天野は、江戸時代から見ても、先祖代々伝わる家というのは、天野全体の1割ぐらいしかありません。その他は、全て移住者です。古き伝統を大切にし、新たな技術や文化が入ってきたわけです。入れ替わったからこそ、存続してきたと私は考えています。先述しましたが、ここ20年で25％が入れ替わっていることもその流れだと思っています。現在も、天野に移住したい待機組が30組ほどいます。昔は、出ていく人は、全ての財産を処分して、他所へ移住していきました。残念ながら今は、空家で残されたりするケースが多く、人の入れ替わりに支障をきたしています。

一時離れても帰りたい村に

将来世代への引継ぎですが、自分たちが住んできた村がいかに素晴らしい村かということを伝えたい。就職などで、一時離れても、最後には、天野に帰りたいという村にしたいと考えています。ですから、村の行事には、できるだけ子ども達を関わらせ、また、優先的に考え取り組んでいます。

研究所：天野らしさとは何でしょうか。

区長：自然豊かな風景、四季折々の自然現象や生き物の活動、様々な遺跡・史跡が残り文化・伝統の香りが漂うところだと思います。

研究所：天野地域は、住民自治が早くから確立した地域だと思います。「蛍が飛ぶ里」「産業廃棄物建設処分場の阻止」、郷土の歴史や文化を尊敬する人たち。そうした自主・自立の気風は健在ですか。そうお考えになる理由は何でしょうか。

区長：天野もかつては、村内が一つにまとまってはいませんでした。上・下（上天野・下天野）に分かれていました。今のような自主・自立の気風が濃く生まれたのは、やはり、産業廃棄物投棄阻止闘争です。1991年から10年間、毎日当番を決め見張り小屋での監視活動を行いました。この取り組みのおかげで、「村が一つにならなければ、この闘争の勝利は無い。」という考えが住民に生まれました。その時の区長は、長靴を家の裏口に置いて就寝したそうです。阻止闘争への妨害を恐れてです。強いリーダーシップとぶれない意思が住民の自治能力を飛躍的に高めたと考えます。つらい闘争ではありましたが、業者倒産、競売となり、自治区が用地を落札し闘争に幕をおろしました。以後の村は、一つになり。村社会とは思えないほど自立的で民主的な集落となりました。

研究所：移住で新たな住民も移り住んでいます。地域コミュニティの構成員にも変化がみられると思います。天野は「隠れ里」といわれた時代から、この土地を求めてきた人たちを拒まなかった歴史があります。新たな協働の仕組みづくり、地域づくりをどのように展開していくか、ビジョンと具体的な戦略をお聞きしたいのですが。

「田舎暮らし7か条」示し　移住者受入れ

区長：先に記述しましたが、今でも多くの方が移住してきてくれています。移住に関してですが、都会から移住される方の中には、田舎暮らしや村社会をきちんと理解されてこられる方ばかりではありません。昔のきつい封建社会ということでは決してありませんが、何かと煩わしいことが多々あります。「天野の里づくりの会」では、移住を考えられる方の相談にも応じています。その方たちのために、自治区としても田舎暮らしの参考になればと「田舎暮らし7か条」を作成し、村として移住者受入のための心得を機関決定しています（天野の里づくりの会ホームページを参照）。今まで移住された方も、この7か条について十分理解いただいていますので、新住民、旧住民というトラブルは今のところ起こっていません。今後も、この取り組みを続けていきます。

研究所：最後に、天野からのメッセージがあればお話し下さい。

区長：お越しいただいている皆様には、本当に心から感謝を申し上げます。四季折々、それぞれ違った村の顔を見ることができます。今後ともよろしくお願いいたします。

天野の概要は、「天野の里づくりの会」のホームページや「簡易宿泊施設ゆずり葉」のブログにもありますので是非御一読下さい。